

3 遺物

(1) 縄文時代早期～前期の土器(第207・219・225・226・228・233～258図・写真図版159～169・173・174・176・180～199)

縄文時代早期～前期に帰属する土器は掲載点数で559点である。多期にわたる型式のものが存在し、以下のとおり分類した。

- I 群土器：大新町 a 式に比定される土器
- II 群土器：根井沼式～寺の沢式に比定される土器
- III 群土器：物見台式に比定される土器
- IV 群土器：鳥木沢式・蛭沢 A II 式・常世式に比定される土器
- V 群土器：吹切沢式・大寺上層式に比定される土器
- VI 群土器：早期中葉後半期に帰属すると考えられる土器
- VII 群土器：ムシリ I 式・槻木 1 式に比定される土器
- VIII 群土器：壳場Ⅷ群に比定される土器
- IX 群土器：赤御堂式に比定される土器
- X 群土器：早稲田 5 類に比定される土器
- XI 群土器：表館 X 群に比定される土器
- XII 群土器：表館式に比定される土器
- Ⅲ群土器：早稲田 6 類に比定される土器
- Ⅳ群土器：大木 1 式に比定される土器
- Ⅴ群土器：大木 2 a 式に比定される土器
- Ⅵ群土器：大木 2 b 式に比定される土器
- Ⅶ群土器：早期末葉～前期前葉に帰属すると考えられる土器

I 群土器 (545) 幅5～6mmの太い沈線文が多段に施されている。体部片 1 点のみであるため、全体の様相は不明である。盛岡市大新町遺跡から出土した資料に類似している。

II 群土器 砲弾形の尖底深鉢を主体とする。平口縁で、口唇部内面に裝飾が施されるものはみられない。爪形刺突文の他に、貝殻文各種・沈線文が施され、次のように細分した。

a 類 (332・533・542・546～548)：上半部に 2 段 4 列の爪形刺突文が多段にわたって施されるものである。同一個体の可能性が高い。口縁端部に 2 段の爪形刺突文が巡り、全面に横位の貝殻押しき文が地文のように施文されている。内面はミガキ調整を主体とし、器厚は 10mm 前後と厚手である。

b 類 (192・218・260・266・280・326・334・340・356・539・549～568)：幅広い口縁部文様帯を持ち、N 字状・V 字状・X 字状の幾何学的なモチーフの沈線文が横位に展開するものである。沈線は数条を 1 単位としている。口縁端部には 2～4 段の爪形刺突文が巡り、全面に貝殻文が地文のように施文されるものと、施文されないものがある。口唇部には何らかの裝飾(絡条体疳痕・貝殻疳痕・キザミ)が施され、絡条体疳痕が施されるものは、口唇部が内側から外側に下がって殺がれた形状を呈する傾向が強い。内面はミガキ調整を主体とし、比較的焼成の良い資料が多い。

c 類 (569・570)：口縁部文様帯に V 字状モチーフの貝殻押しき文を横位に展開するものである。b

類の沈線文が貝殻押しき文に置換され、口縁部や内面の特徴などはb類に類似する。

d類 (571～573)：口縁端部に爪形刺突文が巡り、その直下に横位多段の沈線文が施されるものである。口唇部にはキザミが施される。a～c類と比較するとやや薄手である。

e類 (339・574～579)：口縁端部に数段の爪形刺突文が巡り、爪形刺突文以下には横位の貝殻腹縁文が施されるものである。体部下半は無文のものと同様に横位の貝殻腹縁文を施すものがある。口縁部文様帯下端にも数段の爪形刺突文が施されるものが多い。

f類 (193・264・330・429・534・535・580～582・903)：上記以外のものを一括した。193・582・903は5条以上を1単位とする幾何学的なモチーフの沈線文が横位に展開している。類似する資料が盛岡市葉師社脇遺跡から出土している。264は底部の資料である。330は多条の沈線文が施される。429は1段の爪形刺突文が巡り、上部には沈線文、下部には貝殻腹縁文が施される。534・535は幅広い文様帯を持ち、文様帯の端部には4段の爪形刺突文が巡る。断片的な資料であるため、本類にしたが、b類の資料である可能性が高い。580は狭い口縁部文様帯を持ち、斜行する沈線文が横位に展開している。その下端には1段以上の爪形刺突文が巡っている。581は数少ない底部資料で、少なくとも2段の爪形刺突文が確認できる。

Ⅲ群土器 頸部に屈曲部を持つ所謂キャリパー型を呈するものと屈曲部を持たないものの2種がある。1点であるが平底のものが存在する。沈線文・貝殻文・刺突文が施され、次のように細分した。

a類 (261・342・361・583～596)：2条1単位の沈線間に貝殻文を直交する形で寝かし気味に押し当てて充填する枕木状隆帯文を施す一群である。口縁部が残存する資料はすべて波状口縁で、口唇部内面には貝殻腹痕が施されている。口縁部文様帯には麻手状や三角形の幾何学的なモチーフの沈線文が横位に展開している。沈線文の交点には円形刺突文が多用される。文様帯の区画に枕木状隆帯文を用いるものが多く、口縁部と体部の文様帯の境界には波状沈線文が用いられる。内面はミガキ調整が行われ、特に586～590は化粧土を施したかのように光沢を持っている。これらの土器の胎土には砂粒が多く含まれ、それ以外のものには白色・透明鉱物が多く含まれている。

b類 (219・220・244・285・298・362・528・532・544・597～605・902)：一本引きの太い沈線文を施すものを一括した。沈線に重なるように貝殻腹縁文を施すもの(①：219・220・244・285・298・362・528・597～601・902)、沈線に沿って片羽状に貝殻腹縁文を施すもの(②：602・603)、沈線のみのもの(③：532・544・604・605)がある。①は枕木状隆帯文が施されないだけで文様・内面の調整・胎土の混入物はa類と共通する点が多い。波状口縁の頂頭部には貼付突起が施されるものが多く、口唇部内面に貝殻腹痕を施すものと施さないものがある。②は体部片のみの資料で全体の様相は不明であるが、沈線に沿って片羽状に施される貝殻文は明神裏Ⅲ式にも見られる特徴で、明神裏Ⅲ式の影響を受けた可能性が想定される。③は平口縁で、口唇部内部に裝飾は施されない。口縁部文様帯には三角形を主体とした幾何学的なモチーフの沈線文が横位に展開し、沈線の交点には円形刺突文が施されている。口縁上部には対になると考えられる貫通孔が設けられている。内外面ともミガキ調整が行われ、胎土には白色・透明鉱物を含んでいる。532・544はa類の体部片の可能性を含んでいる。

c類 (606)：2条1単位の沈線間に直交する貝殻腹痕を施した枕木状沈線文を施すものである。4単位と考えられる波状口縁で、屈曲部を持たない平底深鉢である。幅広い口縁部文様帯を持ち、N(V)字状の幾何学的なモチーフを横位に展開している。交点には円形刺突文が多用される。焼成はあまり良くない。青森県六ヶ所村の千歳(13)遺跡出土資料と類似している。

IV群土器 早期・前期の土器のなかでは最も出土量が多く、文様要素も多様である。文様要素により次のように細分した。

a類 (221～223・281・286～288・607～636・905)：貝殻文・沈線文・刺突文の組合せにより文様を構成する土器を一括した。幅広い口縁部文様帯を持つものが多い。口縁部が残存する資料のほとんどが波状口縁で、大半の口唇部内面には貝殻痕が施されている。221～223・286～288は入組み状の平行沈線文と刺突文が横位に展開している。221は2個1対の□状の刺突文、222・223・238は楕円状刺突文、238は凹状の刺突文が施される。281・607～613・905は枕木状沈線文と円形刺突文を用いるもので、口縁部文様帯に、X字状(菱形状)の幾何学的なモチーフの貝殻緑文が横位に展開し、交点と枕木状沈線文に沿って円形刺突文が施されている。焼成は比較的良好で、胎土に海綿状骨針を含むのが特徴的である。614～625は2条1対となる平行沈線文と円形刺突文を用いるものである。口縁部が内傾気味になるものと外反するものがある。口縁部文様帯には三角形や四角形等の幾何学的なモチーフの沈線文が施され、貝殻文を地文のように施すものが多い。胎土に多量の金雲母、相当量の白色・透明鉱物を含むものが多い。626は口縁部文様帯に、入組み状の平行沈線文と沈線に沿ったD字状刺突文が横位に展開している。口縁部文様帯には貝殻緑文が地文のように施されている。627～629は平行沈線文と変形円形刺突文を用いるものである。胎土には金雲母を多量に含むもの(627)と白色鉱物を多量に含むもの(628・629)がある。630は平行沈線文と□状刺突文を用いるもので、これらを重層的に施文している。口唇部の波頂部にキザミが施され、内面には貝殻痕が施されていない。631・632は平行沈線文と米粒状刺突文を用いるものである。本類のなかでは焼成が良い部類に属する。633～635は一本引きの太い沈線文と円形刺突文を用いるものである。沈線は三角形のモチーフを横位に展開するものと考えられる。633の胎土には白色鉱物を多量に含んでいる。636は一本引きの太い沈線文とD字状刺突文を用いるものである。文様は縦位に展開している。胎土には金雲母を含んでいる。637は一本引きの太い沈線文と□状刺突文を用いるものである。

b類 (224・245・247・267・282・333・435・443・525・638～647)：貝殻文と沈線文の組合せにより文様を構成する土器を一括した。破片資料が多く全容は不明である。口縁の形態は波状を呈するものが多い。a類と比較すると口唇部内面に貝殻痕を施すものは少なく、638・642・647等で確認できる。224・541は同一個体で、横位・縦位の沈線文と沈線に沿う貝殻緑文が施される。Ⅲ群の影響を受けた土器と考えられる。247・435は枕木状沈線文が施されるものである。224と同様、Ⅲ群の影響を受けた土器と考えられる。245・282・333・525・638～641は平行沈線文を用いるものである。282以外の胎土には金雲母が含まれ、333・638・641に含まれる割合が多い。642～645は一本引きの太い沈線文を用いるものである。643・644は沈線間に貝殻文が充填されている。内面はミガキ調整が施されている。645は内外面とも光沢のある黒色を呈している。267・646・647は楕円状沈線文を用いるものである。楕円状沈線文は常世式で多用されており、常世式の影響が強い一群と考えられる。このことは本類のみならず本群土器に当てはまることである。波頂部から沈線文を垂下させ、口縁に平行する数条の沈線文を施している。646は沈線に沿って貝殻文を羽状に施文している。

c類 (194・225・226・248・316・335・338・430・431・540・648～663)：沈線文と刺突文の組合せにより文様を構成する土器を一括した。断片的な資料が多く、全体像は不明であるが、体部から口縁に向かって直立気味に立ち上がり、口縁部上半で緩やかに外反しながら立ち上がるものとそのまま直立気味に立ち上がるものがある。口縁の形態が判別できるものは波状を呈するものが多いが、平口縁と考えられるものもみられ、一定量平口縁も存在するものと考えられる。口唇部内面に貝殻痕を施すものはみられない一方、口唇部に装飾を施すものが多くみられる。口縁部文様帯は狭く、沈線文と

刺突文を重層的に配置したものが主体的である。225・335・648は平行沈線文と不整円形刺突文を用いるものである。胎土には金雲母、白色鉱物が含まれている。248・649～653は平行沈線文と□状刺突文を用いるものである。胎土には金雲母が含まれている。刺突文と沈線文が重層的に施されているものは平口縁状を呈し、口唇部にキザミが施されている。653は4単位と考えられる山形突起を有するもので、沈線は波状を呈している。194・654・655は平行沈線文と2個1対の□状刺突文を用いるものである。平口縁状を呈し、655の口唇部には爪痕が施されている。胎土には白色鉱物が含まれる。226・338は平行沈線文とD字状刺突文を用いるものである。316は平行沈線文と平行刺突文を用いるものである。430は平行沈線文と円形刺突文を用いるものである。胎土には少量の金雲母が含まれている。540は平行沈線文と凹状刺突文を用いるものである。胎土には少量の金雲母が含まれている。431・656～658は平行沈線文と櫛歯状刺突文を用いるものである。文様は口縁と平行するもののみならず、波状を呈するもの(431・658)が存在する。658の胎土には多量の金雲母が含まれている。659は櫛歯状平行沈線文とD字状刺突文を用いるものである。660・661は櫛歯状平行沈線文と櫛歯状刺突文を用いるものである。波状口縁で、口唇部にキザミが施されている。胎土には多量の金雲母が含まれ、さらに660には多量の透明鉱物も含まれる。662は沈線文と櫛歯状刺突文を用い、格子状の文様を横位に展開している。焼成は悪く、胎土に海綿状骨針を含む特徴がみられる。663は短沈線文とC字状刺突文を用いるものである。短沈線文は刺突文の上端に口縁と直交して浅く施文されている。

d類 (664・665)：沈線文と押し引き文の組合せにより文様を構成する土器である。口縁部の断片的な資料のみである。口唇部内面に貝殻爪痕を施すものはない。664は口縁部文様帯が狭く、沈線文と押し引き文を重層的に施している。焼成は比較的良好で、微量の金雲母を含む。665はX字状の文様配置をとるが、断片的な資料であるため、詳細は不明である。焼成は比較的良好である。

e類 (227・283・315・666～672)：沈線文のみ施文する土器を一括した。口唇部内面に貝殻爪痕を施すものではなく、口唇部にキザミを施すものと施さないものと半々である。口縁部上半で緩やかに外反するものが多い。227・283・315・666～668は平行沈線文を用いるものである。沈線は口縁に対して重層的に配置される傾向があり、直線的なものと波状を呈するもの(283・667)、山形(V字状)を呈するもの(227)がある。666の胎土には多量の金雲母が含まれている。669～671は一本引きの沈線文を用いるものである。669・670は底部に収束する沈線文を全体に施し、669は幅4～5mmの波状沈線文、670は幅2～3mmの直線的な沈線文を用いている。670の焼成は比較的良好である。671は幅0.5mmの筋状の沈線文を口縁部上半に施文している。672は口縁部に少なくとも2段の短沈線文を施すものである。

f類 (673～675)：貝殻文・刺突文・押し引き文の組合せにより文様を構成する土器を一括した。口縁部はゆるやかに内湾気味に立ち上がる。口唇部内面には貝殻爪痕が施されている。貝殻文→櫛歯状工具による押し引き文→竹管による円形刺突文の順で施文している。焼成は比較的良好で、胎土には金雲母を含んでいる。

g類 (216・228・249・257・290・299・676～688)：貝殻文と刺突文の組合せにより文様を構成する土器を一括した。口縁は波状を呈するものが主体的で、口唇部内面に貝殻爪痕を施すものは601の1点のみである。216・299は不整円形刺突文を施すものである。216は3段の貝殻文を施文し、その下端に2段以上の刺突文を施している。299は多段のレ点状の貝殻文を施文し、その下端に刺突文を施している。228・676～678は円形刺突文を施すものである。体部に屈曲部を持ち、口縁部は直立～内湾気味に立ち上がる。文様帯は屈曲部より上部の口縁部に狭い口縁部に限定され、屈曲部より下半は無文である。口縁部文様帯には□と×を組み合わせた幾何学的なモチーフの貝殻文が横位に展開し、交点には円形刺突文が施される。676・677の刺突文はX字状を呈している。胎土には海綿状骨針

を含む特徴がみられる。249・679～681は楕円形刺突文を施すものである。249は斜位多段の貝殻文を施文し、その両端に刺突文を施している。刺突文以下は無文である。679・680は横位多段の貝殻文を施文し、その下端付近に刺突文を施している。刺突文以下は無文である。口唇部にはキザミが施されている。679は焼成が悪く、胎土に多量の砂粒を含む。680は焼成が比較的良好で、胎土に少量の砂粒を含む。681は貝殻腹縁文と刺突文が縦位に施文されている。焼成は比較的良好である。682～685はD字状刺突文を施すものである。682・683は数段の浅い貝殻文を口縁部に巡らし、その上端に刺突文を施している。口唇部にはキザミが施される。焼成は比較的良好である。684は数段の矢羽状の貝殻文を口縁部に巡らし、その両端に刺突文を施している。焼成は比較的良好で、胎土には多量の金雲母・白色鉱物を含んでいる。685は横位多段の貝殻文を施し、2段の刺突文を口縁部に巡らしている。257・290・686・687は□状刺突文を施すものである。焼成はあまり良くない。257・686は2段の貝殻文を施し、その下端に刺突文を巡らしている。胎土には少量の金雲母・砂粒、透明鉱物を含んでいる。290は1段の貝殻文を施し、その下端に刺突文を巡らしている。胎土には多量の金雲母を含んでいる。687は鋸歯状の貝殻文を横位に展開し、波頂部から垂直方向へ刺突文を施している。胎土にはやや多量の白色鉱物・砂粒を含んでいる。688は鋸歯状刺突文を施すものである。横位多段の貝殻文が施文されている。

h類 (195・196・237・250・268・300・322・543・689～703・904)：貝殻文のみ施文する土器を一括した。口縁部の断片的な資料の中には、g類の資料が含まれている可能性がある。資料口縁は波状を呈するものが主体的で、内面に貝殻圧痕が確認できるのは580の1点である。196・250・268・689～693は矢羽状の貝殻文を施すものである。口縁は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁部に文様が集中するが、268・693は体部にも矢羽状の貝殻文が施され、施文単位毎に押圧の強さを変えている特徴がみられる。691の胎土には多量の金雲母を含んでいる。543・694～696・904はV字状(山形)の貝殻文を施すものである。口唇部に装飾が施されている。体部から緩やかに外反する傾向がみられる。体部以下は無文のものが多い。694・695の胎土には砂粒や透明鉱物を含んでいる。195・237・300・322・697・698は縦位や斜位の貝殻文を施すものである。V字状や山形状の規則性はみられない。口唇部には貝殻圧痕や刺突が施されている。699・700は口縁部に縦位の貝殻文を施すものである。700の口縁は平口縁状である。2点とも焼成は比較的良好で、700の胎土には少量の金雲母を含んでいる。701は口縁部に縦位の貝殻文を1段施し、その下端に1段の貝殻圧痕文を施すものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、平口縁状を呈する。圧痕以下は無文の可能性が高い。702は横位多段の貝殻文を施すものである。直立気味に立ち上がり、口縁は平口縁状を呈する。焼成はあまり良くない。703は斜位の貝殻文を施すものである。口縁は平口縁状を呈する。胎土には微量ではあるが、海綿状骨針を含む特徴がみられる。

i類 (197・198・229・238・239・243・251～254・291・301・302・306・307・319・323・324・348・704～721)：刺突文のみ施文する土器を一括した。口縁は波状口縁・平口縁ともにみられる。他の分類と比較すると平口縁の割合が高い。口縁部上半で細くなりながら立ち上がるものと屈曲気味に立ち上がるものがあるようである。口唇部にはキザミや刺突・圧痕を施すものが多い。593はほぼ全面に文様が展開しているが、主体となるのは口縁部に文様が集約し、横位多段に展開しているものである。197・243はへら状工具による刺突文を施すものである。197の胎土には微量の金雲母を含む。229・239は凹状の刺突文を施すものである。251・704は円形刺突文を施すものである。704の胎土には少量であるが砂粒を含む。705・706はD字状の刺突文を施すものである。胎土には白色鉱物を含んでいる。238・301・306・348・707は不整形円形刺突文を施すものである。胎土には金雲母を含んでいるものが多い。

707には多量の白色鉱物を含んでいる。708～710は□状刺突文を施すものである。胎土には白色・透明鉱物の混入が目立つ。291・307・323・711は2個1対の□状刺突文を施すものである。711の胎土には中量の白色鉱物、少量の金雲母が含まれる。302・319は不整形の刺突文を施すものである。302の胎土には金雲母が含まれ、319の胎土には海綿状骨針が含まれる。252・712～717は2個1対の鼠歯状の刺突文を施すものである。712～716は上面観が四辺形を呈するもので、X字状のモチーフを構成する面と重層山形を構成する面が交互に配置される。胎土に赤色粒を多く含む特徴がみられる。717は口縁部に1段の非常に浅い刺突文を施している。198・253・254・324・718～721は数段～多段の櫛歯状刺突文を施すものである。胎土には微量～少量の白色鉱物を含むものが多い。253・324・720には多量の金雲母を含んでいる。

j類 (289・722)：貝殻文と押しき文の組合せにより文様を構成する土器である。口縁部には貝殻文を横位に展開し、その下端に1段の押しき文を施している。口縁は波状を呈する。胎土には金雲母・砂粒・白色鉱物を微量～少量含んでいる。

k類 (723)：刺突文と押しき文の組合せにより文様を構成する土器である。横位多段に刺突文と押しき文を交互に施文している。焼成は比較的良好で、内面にはミガキ調整が施されている。胎土には少量の透明鉱物が含まれる。

l類 (246・255・258・320・327・441・724～730)：押しき文のみ施文する土器を一括した。口縁部の断片的な資料しかない。口縁部が直立気味に立ち上がるものと口縁部に強く外反するものがみられる。口縁は波状口縁と平口縁がみられ、平口縁及び平口縁状を呈するものの口唇部にはキザミが施される傾向が強い。246・255・320・327・441・724～726は口縁に平行する横位多段の刺突状の押しき文が施されるものである。胎土には白色鉱物や砂粒の混入が目立つ。全体的に微量であるが赤色粒が含まれる特徴がみられる。726には金雲母も含まれる。258・727・728は口縁に平行する横位多段の櫛歯状工具による押しき文が施されるものである。728の胎土には多量の金雲母が含まれる。729は2対1対の角状の押しき文を施すものである。押しき文内の痕跡は□状を呈する。横位多段の押しき文を施し、波頂部から3条の押しき文を縦位に施している。胎土には砂粒が含まれる。730は数条の右下がりの押しき文を施すものである。焼成は非常に悪く、胎土にはやや多量の砂粒を含んでいる。

m類 (230)：貝殻文・沈線文・押しき文の組合せにより文様を構成する土器である。口縁部の断片的な資料1点のみである。口縁は波状を呈する。胎土には金雲母や白色鉱物を含む。

V群土器 砲弾形の尖底深鉢を主体とする。口縁部上半で緩やかに開きながら立ち上がるものと、やや強めに外反するものがみられる。文様の特徴により次のように細分した。

a類 (199～202・213～215・231・232・284・303・304・308～310・317・321・337・347・351・352・357・731～745)：貝殻による連続波状文を施す土器を一括した。口縁部に数段～多段で横位に展開し、体部下半は無文である。大半はサルボウやハイガイなどの放射肋のある種類を使用しているが、745はハマグリなどの放射肋のない種類を使用している。231は貝殻押しき文、742は櫛歯状の貝殻文も施されている。口縁は波状口縁・平口縁(平口縁状を呈するものも含)があり、口唇部に貝殻・絡条体・指頭による圧痕が施されるものが多い。口唇部内面に圧痕を施すものは735と736のみである。内面の調整はミガキ(200・337・357・731・732)、ナデ(199・201・202・213～215・231・232・284・303・304・308～310・317・347・351・352・733～739・742・744・745)、糸痕(321・740・741・743)など多様である。内面にミガキ調整が施されるものの胎土には少量の白色鉱物が含まれるが、それ以外のものには白色鉱物や透明鉱物の混入が目立つ。金雲母を含むものは199・201・

202・213～215・231・232・284・308～310・321・337・351・352・739・745で、738には微量ながら繊維を含んでいる。

b類 (203～206・240・256・279・293～296・442・746～755)：貝殻による押し引き文を主体とする土器を一括した。口唇部に貝殻圧痕を施すものが主体的である。内面の調整はミガキ主体である。203・204・206・279は横位多段の押し引き文を施すものである。205は貝殻押し引き文と鋸歯状の貝殻圧痕を交互の施文している。内面の調整はナデと条痕である。240は横位～斜位の貝殻押し引き文を施している。256は横位多段の貝殻押し引き文を施すものである。体部には浅いD字状の刺突文を施している。293～296は同一個体である。波状口縁を呈し、波頂部から垂直に貝殻腹縁文をV字状に施し、口縁部文様帯には横位多段の貝殻押し引き文を施している。体部にも貝殻押し引き文が施される。胎土には白色鉱物・透明鉱物を多量に含んでいる。442は横位多段の貝殻押し引き文を施している。口唇部には網目状の貝殻圧痕が施される。746は斜方向の貝殻押し引き文が施されるものである。非常に厚手である。胎土にはやや多量の砂粒が含まれる。747・748は幅5mm前後の狭い刺突状の押し引き文を横位多段に施すものである。748は波頂部から短い貼付帯が垂下され、押し引き文以下には貝殻腹縁文が施されている。749は4段の貝殻押し引き文が施されるものである。押し引き文以下は無文である。薄手で、焼成は非常に良好である。750は幅5mm前後の狭い刺突状の押し引き文を施すものである。内面の調整はナデ主体で、焼成はあまり良くなく、胎土には微量の繊維の混入が特徴的である。751は3段以上の貝殻押し引き文を横位多段に施すものである。前述までのものとは違い、押し引き文間には押し引き文の幅と等しい無文部分が設けられている。焼成は非常に悪く、白色・透明鉱物の混入が顕著である。口縁の残存する資料で本類では唯一口唇部に圧痕の施されないものである。752は押し引き文が観察される唯一の底部資料である。当該期には珍しく平底を呈する。753・754は刺突状の押し引き文と鋸歯状の貝殻腹縁文を横位多段に施文しているものである。内面調整は条痕・ナデである。胎土には微量～少量ではあるが、黒色・白色・透明鉱物、砂粒・赤色粒など多様なものが含まれる。755は貝殻押し引き文の他に鋸歯状の沈線文が施されるものである。薄手のつくりで、焼成は良好である。本類の胎土に金雲母を含むものは205の1点のみである。

c類 (756)：沈線文と刺突文により文様を構成する土器である。平口縁で、口縁に直交する2個1対のキザミの施される短い貼付帯が施されている。貼付帯を挟んで右側には3～4段の楕円形刺突文と鋸歯状沈線文が施され、左側には3段以上の楕円形刺突文が施されている。内面調整は条痕を主体とする。比較的薄手で、焼成は良好である。胎土には白色・透明鉱物が含まれる。

d類 (757～759)：上記以外の隆帯を施すものを一括した。757は口縁部上端に幅13～15mmの絡条体圧痕が施される隆帯が巡り、3条1単位の鋸歯状の押し引き文と2条1単位の鋸歯状の沈線文が施文されている。内面調整はナデを主体とし、胎土にはやや多くの透明鉱物や海綿状骨針が含まれる。758・759は隆帯が巡る体部資料で、758は沈線文、759は貝殻腹縁文が施されている。

e類 (207・311・760～765)：絡条体圧痕を施すものである。口縁部の断片的な資料しかないが、口縁は平口縁もしくは平口縁文を呈するものが主体で、口唇部に装飾を施すものが多い。口縁に沿って多段に施すもの(207・760・761)、矢羽状に施すもの(762)、鋸歯状に施すもの(763)、不規則なもの(311・764・765)がある。

VI群土器 (191・208・217・233・241・242・259・262・292・305・313・314・318・336・341・353・432・766～777) 早期中業後半期に帰属すると考えられ、比定される型式を特定できなかったものを一括した。353は押し引き文と考えられる文様が施文されているが、断片的であるため、本群に含めた。

766は単軸輪条体を縦位に帯状に施したものである。内面調整はミガキを主体とする。薄手で、焼成は非常に良好である。出土層位から当該期に帰属すると判断した。767・768は条痕文主体のものである。767の内面調整はミガキを主体とし、胎土に微量の砂粒や透明鉱物を含んでいる。768の内面調整はナデ主体である。胎土に多量の透明鉱物、少量の白色鉱物・砂粒を含んでいる。191・208・217・233・241・242・259・262・292・305・313・314・318・336・341・432・769～777は無文のものである。770・775・776は乳房状を呈する。外面の器面調整は769・770がミガキ主体、そのほかはナデ主体である。262の口唇部には竹管による押圧が施されている。769の口唇部内面には弧状のキザミが施されている。769・770は比較的焼成が良好で、胎土に微量～少量の白色鉱物・透明鉱物・砂粒を含んでいる。ナデ主体のものは焼成があまり良好なものはみられず、胎土には砂粒が目立つもの(771)、白色鉱物が目立つもの(772・775・776)、金雲母が目立つもの(773)がある。191・241・259・292・314・336・341には金雲母が含まれる。

Ⅶ群土器 丸底や平底が多く、尖底を呈するのはわずかである。口縁は平口縁を主体とする。5mm前後の薄手のものが非常に多い。口唇上部に装飾を施すものは209～211・791である。文様の特徴により次のように細分した。

a類 (209～211):沈線文と細隆起線文の組み合わせにより文様を構成するものである。波状口縁で、波頂部から細隆起線文を垂下させ、口縁部・体部文様帯の区画にも細隆起線文を用いている。口縁部上部文様帯には2条の鋸歯状沈線文、口縁部文様帯には幅1～1.5mmの沈線文を施文している。209の口縁部文様帯の沈線は2～3条1単位で幾何学的なモチーフを横位に展開している。3点とも胎土には多量の白色鉱物を含んでいる。

b類 (234・235・325・331・355・367・526・778～807):沈線文を主体とするものである。778・779は口縁に直交する多条の沈線文と2～3条1単位の斜行する沈線文を組み合わせた幾何学的なモチーフが横位に展開している。口縁部と体部の文様帯の区画に横走する細隆起線文を1条施している。口縁は平縁である。焼成は非常に悪く、胎土に金雲母を含んでいる。780～785は横走する沈線文と斜行する沈線文を組み合わせたものである。内面は条痕による調整を施すものが主体的である。薄手で、784以外は焼成が良好である。胎土には金雲母を相当量含むもの(780～782・784)と全く含まないもの(783・785)がある。786は格子状の沈線文を施すものである。本類の資料の中ではやや厚手である。胎土に多量の金雲母や相当量の白色鉱物を含んでいる。787～793は幅3mm前後の浅い斜行沈線文を施すものである。前者4点は右下がり、後者3点は左下がりの沈線文である。口縁は平縁・波状縁の両者がある。胎土に白色鉱物を含むものが多い。金雲母は787～789に含まれる。794・795は幅2mm前後の浅い、主に縦位の沈線文を施すものである。胎土に多量の金雲母を含んでいる。234・325・331・355・367・796～802は幅1～2mmの浅い沈線文を施すものである。右下がり主体のもの(234・796・797・800・802)、横方向主体のもの(331・798)、縦方向主体のもの(801)、格子状のもの(325・355・367・799)がある。口縁は平縁が主体を占める。胎土には多量の金雲母を含むものが多い。526・803～806は幅3mm前後のやや深い沈線文を施すものである。横方向主体のもの(803・804・806)と縦方向主体のもの(805)、不規則なもの(526)がある。非常に薄手であるが、焼成のあまり良くないものが多い。526・806以外の胎土には金雲母が含まれない。806は平底状の底部資料である。235は幅4～5mmの浅い沈線文を施すものである。右下がりの粗い沈線文である。焼成は比較的良好で、胎土には金雲母・白色鉱物を含む。807は非常に細く(1mm以下)、深い沈線文を施すものである。非常に薄手で、焼成は良好である。胎土には多量の金雲母を含んでいる。

c類 (212・263・297・527・529・538・808～824)：細隆起線文を主体とするものである。モチーフ、細隆起線文の特徴によって細分可能である。808・809は5条の平行する細隆起線文に、直交する短い細隆起線文を施して、文様単位として、山形状に施文しているものである。体部は無文で、体部との区画には梯子状の細隆起線文を巡らせている。口縁は平縁である。527・529・538・810～812は梯子状の細隆起線文を主体とするものである。断片的な資料であるため、813～816の断片的な資料を含んでいる可能性がある。810の胎土には海綿状骨針を多く含んでいる。212・813～816は一端が直線的、もう一端が曲線的で、内部を平行する細隆起線文で連結する、半割した木葉状の細隆起線文を施すものである。口縁は平縁を主体とする。器面の調整として、条痕を施すものが多い。817～821は口縁に平行する多条の細隆起線文と、平行する細隆起線文を連結する直交する細隆起線文を施して文様としているものである。直交する細隆起線文の口唇部には貼付突起が施されている。器面は灰色を呈し、胎土には金雲母を含まず、黒色鉱物を含むという、当該期の他の資料とは異なる特徴を持っている。263は細隆起線文を横・斜方向に施文するものである。裾部2mmの断面形が三角形を呈する細隆起線文である。297は口縁部に一条の細隆起線文を施すものである。裾部4mmで断面形が三角系状を呈している。器面の右下がりのナデ調整が特徴的である。822・823は細隆起線文を横方向のみに施すものである。裾部2～3mm、頂部0.5mmの断面形が三角形を呈する特徴的な細隆起線文である。824は不規則な細隆起線文を施すものである。内面はナデ主体の調整、胎土には金雲母を含まない等、当該期の他の資料とは異なる特徴を持っている。

d類 (329・825)：絡条体圧痕を施すものである。非常に薄手で、焼成は良好である。内面は条痕による調整を施している。

e類 (826)：隆帯を巡らし、隆帯上に刺突文を施すものである。焼成は比較的良好で、胎土に金雲母を含んでいる。

f類 (265・343・350・354・364・433・436・444・531・827～832)：文様の無いもの（条痕文のみのもの）を一括した。口縁は平縁のみである。体部の資料については、IV類の体部資料の可能性を含んでいる。350・444は数少ない底部資料で、平底である。

VII群土器 断片的な資料のみで、全体の様相は不明である。文様の特徴により次のように細分した。

a類 (833～836)：5mm前後の幅のある太い沈線文を施文する一群である。薄手であるが、あまり焼成は良いほうではない。胎土に金雲母は含まれない。口縁は波状を呈すものがある。

b類 (837～839)：小形円形刺突文を施すものである。838・839は鋸歯状の沈線文も併用される。内面の調整は横方向の条痕である。838の口唇部内面には多段の小形円形刺突文が施されている。

VIII群土器 断片的な資料が多く、全体の様相は不明である。文様の特徴により次のように細分した。

a類 (840)：隆帯を巡らすものである。隆帯上には1条の沈線を巡らせ、絡条体圧痕を施している。焼成は比較的良好で、胎土に金雲母を含んでいる。

b類 (349・841)：表面縄文、裏面条痕文のものである。841の口縁は波状を呈す。やや薄手で、焼成は良好である。

c類 (328・842～846)：表裏面とも縄文が施文されるものである。842・843はR L、328・844～846はL Rを原体とし、846は同一原体を異方向に施文して羽状にしている。裏面は表面と同一の原体を施文している。胎土には白色鉱物を多く含む傾向があり、繊維の含有量は全体的にあまり多くない。328の胎土には金雲母を含んでいる。

X群土器 (847・848) 847は縄の束と考えられる特殊な縄文を施文するものである。焼成はあまり良くない。胎土にはあまり繊維が含まれない。848は附加条縄文を施文するものである。胎土に繊維を多量に含んでいる。

XI群土器 (849～851) 弧状もしくは連弧状の沈線文を施すものである。幅2～3mmの深いしっかりした沈線文を施す。口縁は平縁である。焼成は比較的良好である。胎土には相当量の繊維を含む。

XII群土器 (344・852～854) 344・852・853はヘラ状工具による連続刺突文で幾何学的なモチーフを施文している。胎土には繊維を含んでいる。854は口縁部に捻糸文、体部に単節縄文を施している。胎土には繊維とともに少量の白色鉱物を含んでいる。

XIII群土器 (855～862) 855は羽状縄文を施文するものである。焼成はあまり良くない。胎土には相当量の繊維を含んでいる。856～860は複節縄文を施文するものである。口縁は平縁・波状縁の両者がある。856～859がR L R、860がL R Lである。厚手で、胎土に相当量の繊維を含むものが多い。861・862は単節縄文を施文するものである。口縁は平縁・波状縁の両者がある。2点ともL Rで、胎土には相当量の繊維を含んでいる。

XIV群土器 (863・864) 組紐回転文を施文していると考えられるものである。焼成はあまり良くない。胎土に繊維を含んでいる。

XV群土器 文様の特徴により次のように細分した。

a類 (865・866)：単軸絡糸体第1類が施されているものである。焼成は比較的良好で、繊維の含有量はあまり多くない。

b類 (867)：単軸絡糸体第1A類が施されているものである。胎土に繊維を含んでいる。

c類 (868)：綾絡文が施されているものである。本群で残存状態が最も良好な資料である。4単位の山形突起を持つ。体部には非結束羽状縄文が施される。胎土に多量の繊維を含む。

d類 (236・274・275・472・869～875)：不整捻糸文が施されているものである。口縁部文様帯に不整捻糸文が施される資料の体部には、羽状縄文が施されるもの、単節縄文のものがある。胎土には含有量の違いはあるが、繊維が含まれる。

XVI群土器 (876) 附加条縄文が施文されている。胎土には微量であるが繊維が含まれている。

XVII群土器 (276～278・345・346・363・365・366・434・530・877～901) 胎土には包含量の多寡はあるが、繊維が含まれているものが多い。278は単節縄文を施文している。断片的であるため、不鮮明であるが、沈線文が施文されている可能性が高い。877はV字状もしくは山形の沈線文を施している。878は沈線文と円形刺突文を施している。879は隆帯が巡るものである。隆帯上には絡糸体尻痕が施される。880は単軸絡糸体第1類が施されるものである。881は単軸絡糸体第1A類が施されるものである。882～885は綾絡文が施されるものである。886～901は縄文主体のものである。276・886～888は非結束羽状縄文、889・890は複節縄文、277・345・346・363・365・366・434・530・891～899は単節縄文、900は無節縄文、901は直前段反熱縄文が施文される。

(2) 縄文時代中期末葉～後期前葉を中心とする土器 (第8表)

本遺跡出土の土器群は、検出遺構の主体となる時期と同様、前掲(1)縄文時代早期～前期の土器群と、縄文時代中期末葉～後期前葉を中心とする土器群とに大別される。出土土器群の整理・検討に際しては、前者(縄文時代早期～前期の土器)と「その他全てのもの」に二分し、それぞれ調査員が分担して取り扱うこととした。よって、ここに記述した後掲図版において「後期中心」とした資料には、縄文時代中期末葉～後期前葉が主体ながらも一部他時期の資料が含まれることを御了知願いたい。

中期末葉～後期前葉の土器は遺構内から出土したものが大半を占めている。よって、遺構として認識される以前に取り上げた土器のうちの相当量は、本来は遺構埋土に伴っていた可能性が高いと考えられることから、該期の遺構外出土土器については、各地点に所在する遺構との関連性を検討出来るよう出土地点(グリッド)順に掲載した。以下、個体ごとの属性記載は一覧表と図版に譲り、本遺跡における該期土器の概要を述べたい。

まず、縄文時代中期末葉に位置づけられるのは、10 (RA05出土、以下括弧内出土遺構名)、38 (RA09)、136・137 (RA12複式炉内)、182・185・190 (RA18)、437・438 (RD50)、483 (RZ02埋設土器本体)等である。単節・複節の斜縄文を地文とし幅広く浅い沈線と磨消縄文による大振り意匠が胴部上半に展開する一群で、概ね大木10式期に比定される。遺構外の出土資料では981・1000・1042などがこれに相当する。該期の大形住居跡RA12は埋土中位(主に人為堆積の黄褐色土層上面)から大量の土器が出土しているが、これらの主体は後続する後期初頭～前葉のものであり、床面上では該期(廃絶前)に相当する遺物はほとんど出土していない。これに象徴されるように、本遺跡における該期の土器の出土量は、後期初頭～前葉に比してずっと少なく、炉体の一部あるいは土坑内に埋置・遺棄されたもののみが残されたような印象を受ける。

次に、後期初頭～前葉に位置づけられる土器である。上述の通り本遺跡出土土器の主体を成す。特に、縦位の燃糸文や無節縄文を地文とし、細い棒状工具による沈線文によって多様な意匠が描かれるものが多い。

この中には、いわゆる門前式の特徴とされる円形貼付文と鎖状隆帯に類似する加飾を持つものが認められる。遺構内出土資料では、17・18 (RA07)、21 (RA08)、62 (RA11)、73・100・103・104・106・131 (RA12)、144・148 (RA14)、170 (RA14・15重複部)、178 (RA15)、360 (RA76炉体土器)、390 (RD06)、457 (RD75)、462 (RF17燃焼面と同面の近接出土)、484 (RZ03埋設土器本体)、489 (RZ08埋設土器本体)などがあげられるが、円形貼付文や隆帯上に施される刺突は典型的な門前式のそれとは趣を異にするものが多い。

円形貼付文には整った環状を呈するものは少なく、中心を正面から控えめに刺突したもの(先端でついただけ、あるいは斜めに押しつけた刻み状の刺突のもの)(18・62・405・410等)や、貼付上面を一回り径の小さい竹管状工具で一突きし中央部が盛り上がるもの(131・170・172)、貼付上面を指頭で皿上に凹ませたもの(69・360・457a・462等)、前者に細い竹管状工具による刺突が複数施されるもの(77・480等)、下位に描かれた弧状沈線からなる意匠の頂部を表現したかのように円形貼付上面に「人」字状あるいは鉤状の沈線が刻まれたもの(144・489)など多様である。

また隆帯には、その走行方向と平行に斜めに連続的な刺突が施されたものが多くみられるが、側縁が盛り上がってしっかり鎖状を呈するものはごくわずかである。細い竹管状工具により隆帯上面に垂直の刺突を連続させたものも多く認められる(48・77・109・390・480・484等)。

円形の貼付文と鎖状隆帯が伴うのは、口縁が肥厚し山形突起によって波状をなす深鉢形土器が多

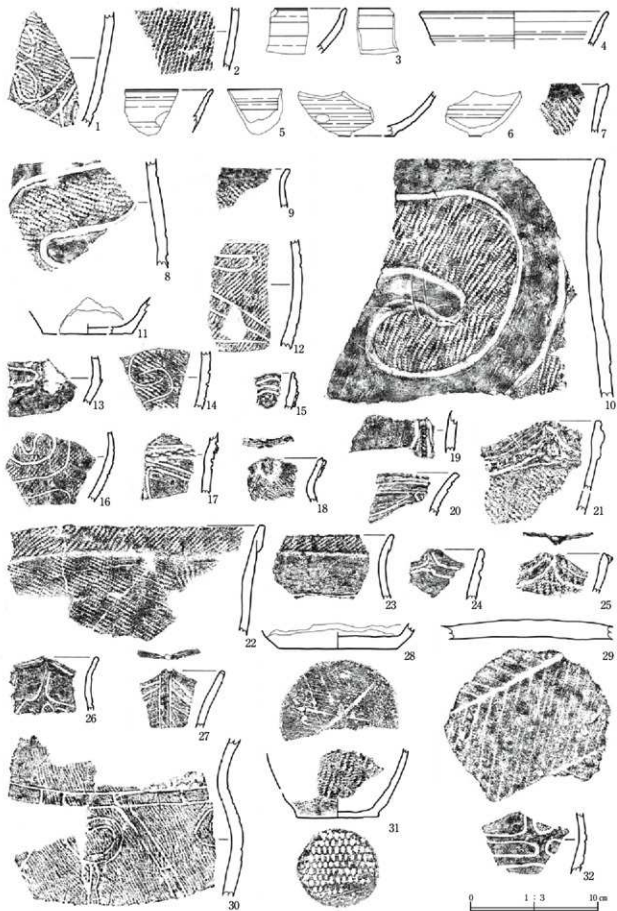
い。横走して頸部と胴部を区画する隆帯と波頂部から垂下する隆帯とが接し、波頂部直下及び隆帯の交点に円形貼付文をもつ場合が大半である。

円形貼付文と隆帯を持つものに限らず、これと同様の器形を呈する土器の文様帯（口縁部～胴部上半あるいは口縁部・胴部それぞれ）に多く見られるのが、三角形（178・360・398・424・484・485・489等）や菱形（97・426等）およびこれに類する曲線的（148・482等）な区画である。三角形等の区画の頂点や斜行する沈線文の交点を起点として、区画内部には、S字状の沈線が縦位に絡んだり、これが連続し蛇行して垂下する文様が描かれる場合が多い。

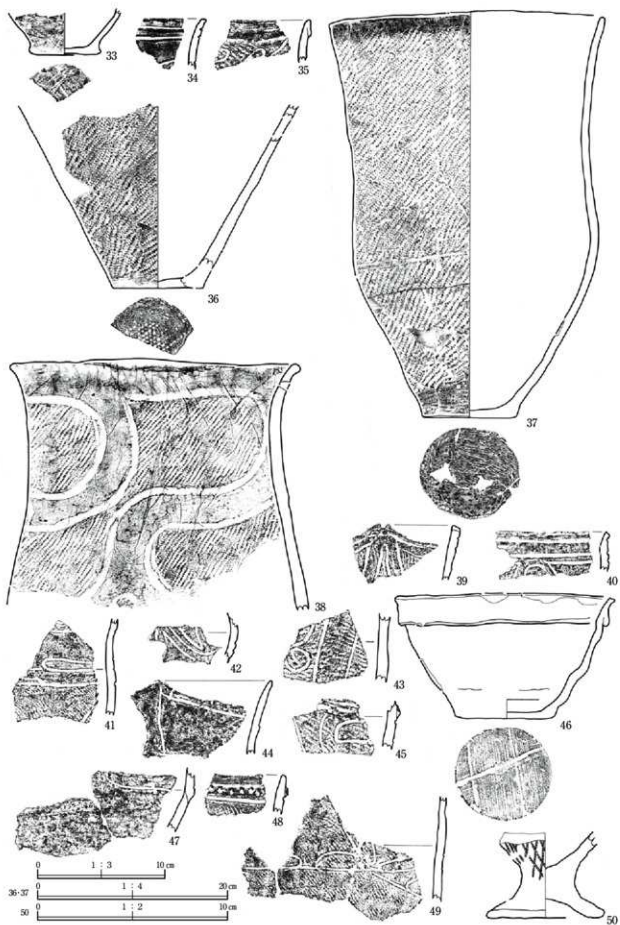
文様帯の区画は、基本的には三角形区画等の頂点を、口縁波頂部やその下位の隆帯接点に対応させて割り付けるよう意識されているようだが、これが徹底されず、波状口縁の波頂部の数と三角形区画の数が一致しないものも目立つ。中には割付け単位がほとんど意識されていないような崩れた区画を持つものもある（162等）。397は山形突起のよって波状を呈する口縁部の下に、三角形を連続させたような鋸歯状の沈線文が連続して文様帯を成すものであるが、その下位の胴上部文様帯には直線的な方形区画部と曲線的な弧状の区画部が隣接して描かれており興味深い。

これらのほかにも、地文を持たず沈線のみで文様が描かれる壺形土器（151・391・411等）、明瞭な磨消帯を持つ曲線意匠を持つもの（152・396等）も少量認められる。

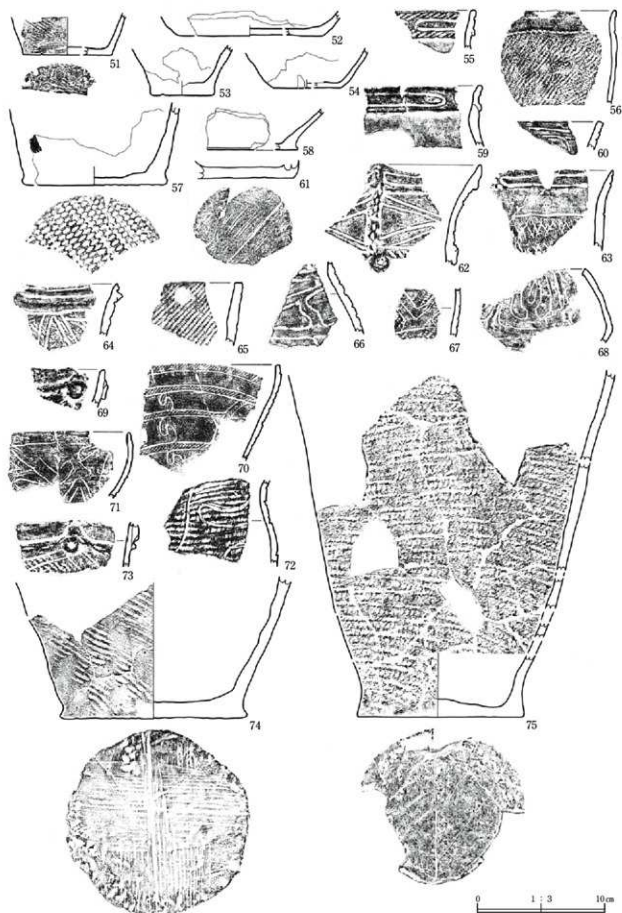
以上の後期初頭～前葉と考えられる土器群については、無論、細分されるべきものであるが、本遺跡においては、上述の通り、文様構成要素の混在や意匠の変形（不格好さ）など、製作者の技量の推測が目立ち、意図された範囲が見定め難い点や、大きな時間差を想定しづらい遺構内出土資料（たとえば大形竪穴住居RA12内の遺物集中面からの出土）に多様な要素が混在する点などから、細かな時期差を求める観点からの検討は十分に行えなかった。



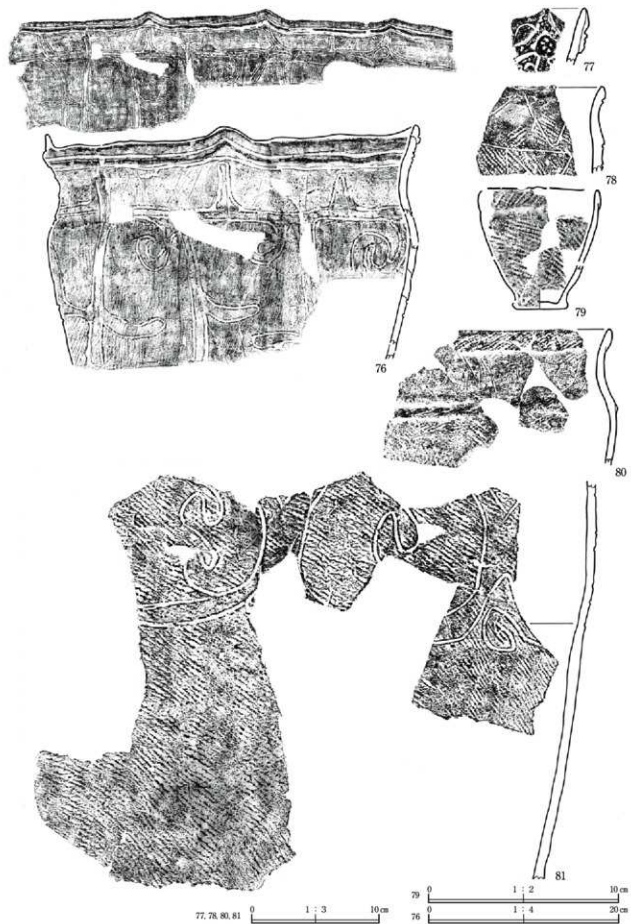
第194図 遺構内出土土器(1)



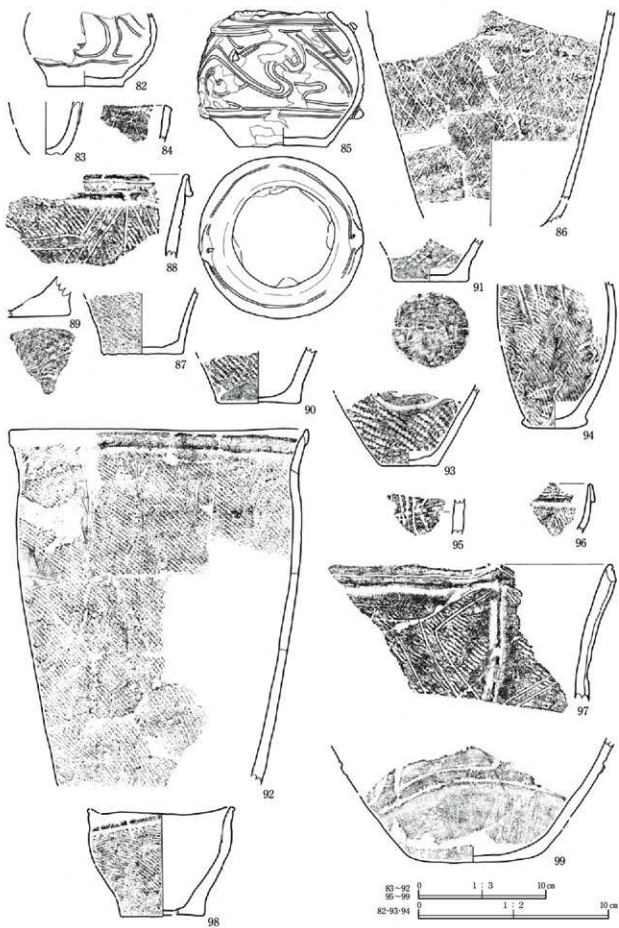
第195図 遺構内出土土器(2)



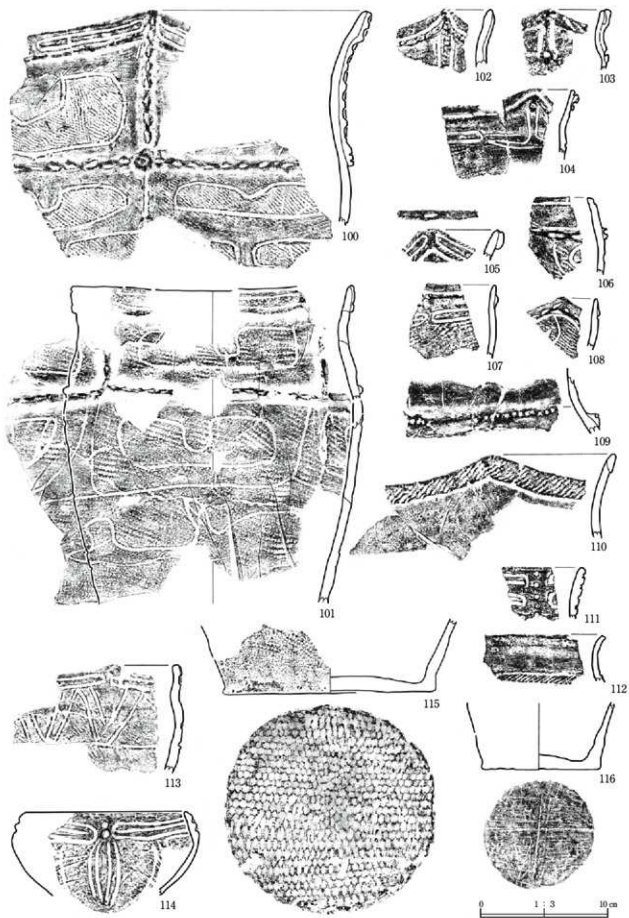
第196図 遺構内出土土器(3)



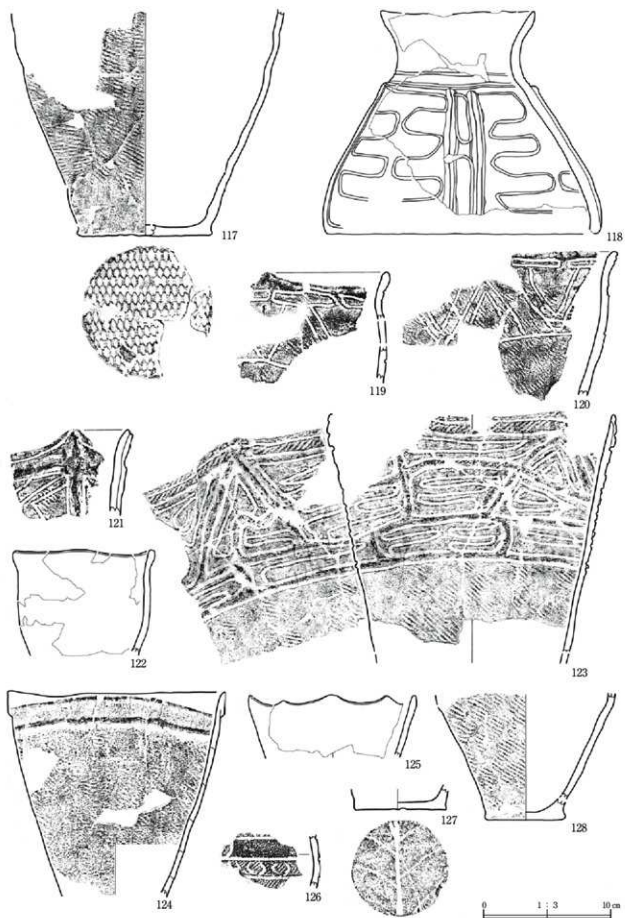
第197図 遺構内出土土器(4)



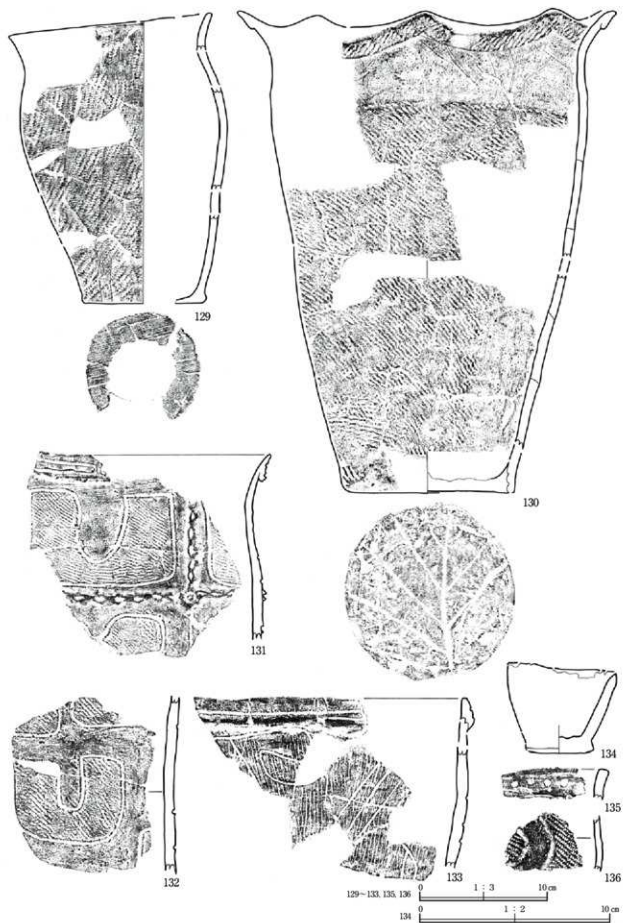
第198図 遺構内出土土器(5)



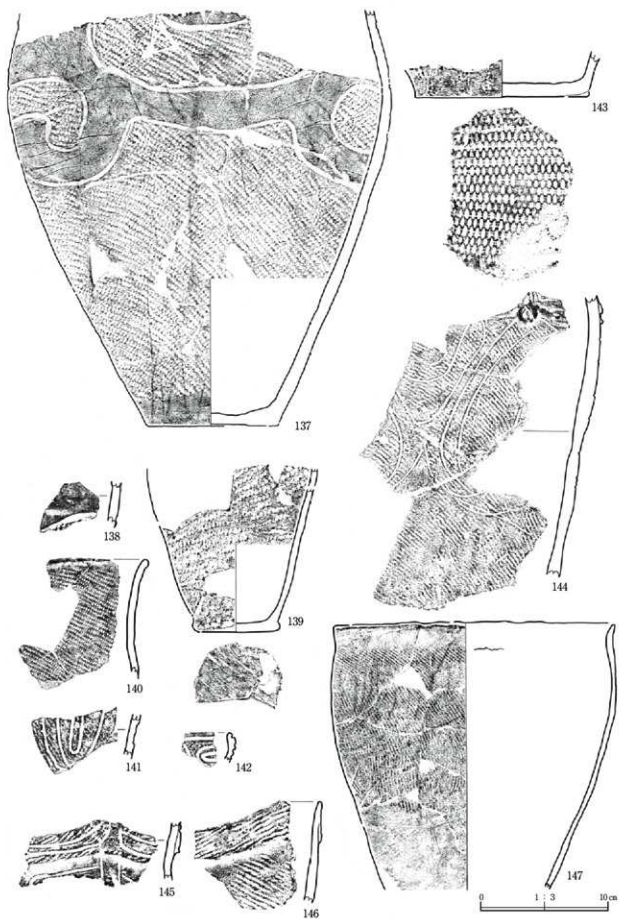
第199図 遺構内出土土器(6)



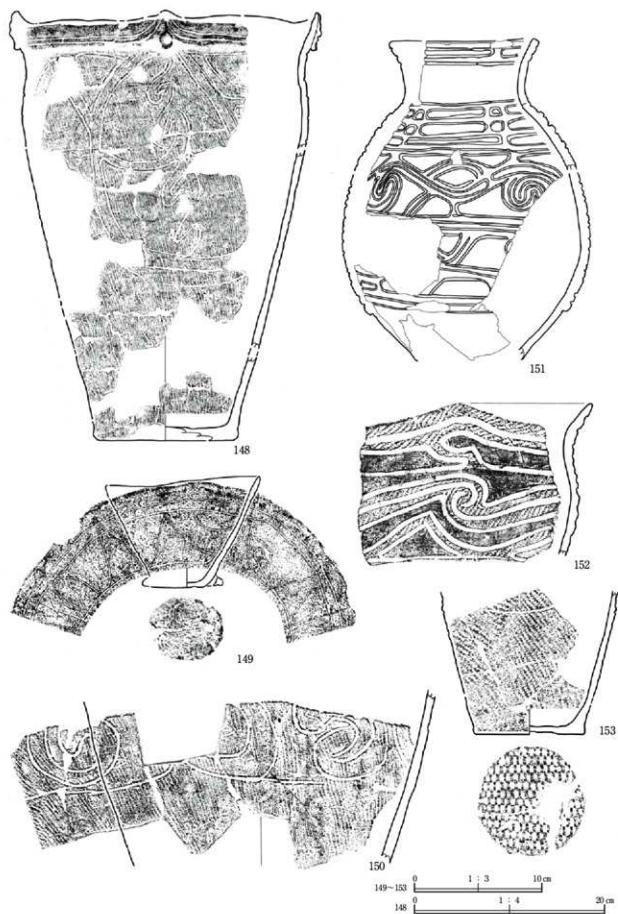
第200回 遺構内出土土器(7)



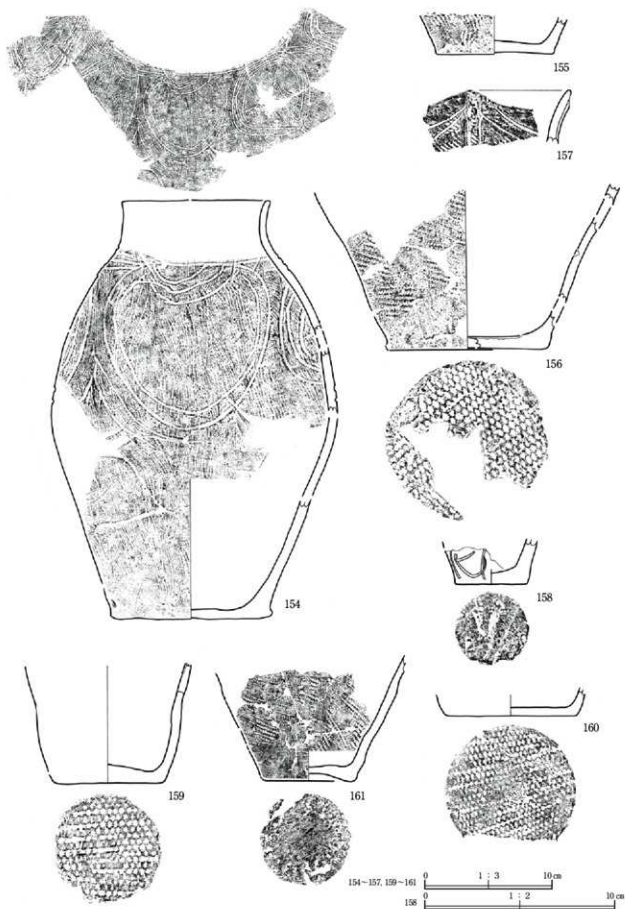
第201図 遺構内出土土器(8)



第202図 遺構内出土土器(9)



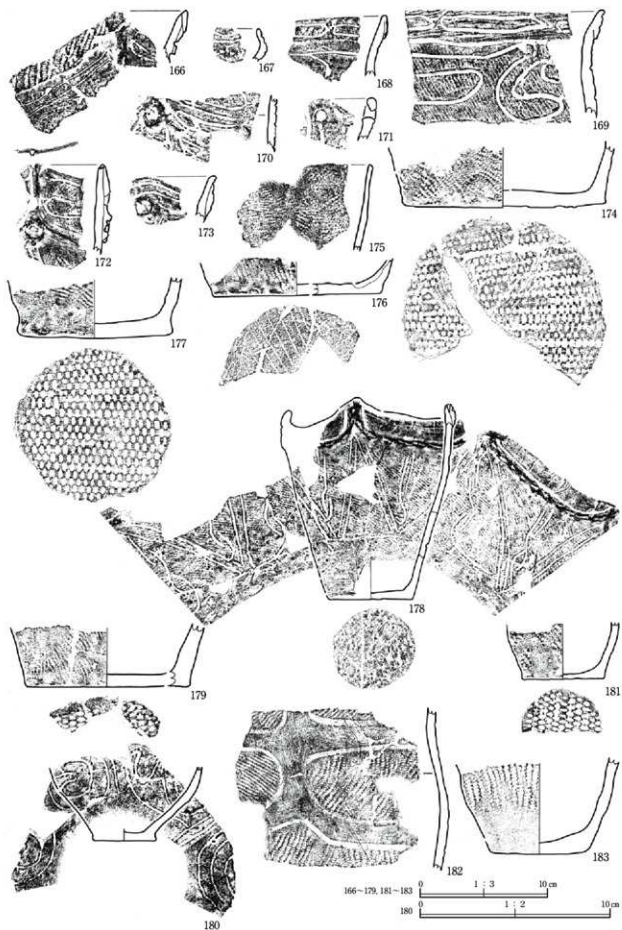
第203図 遺構内出土土器(10)



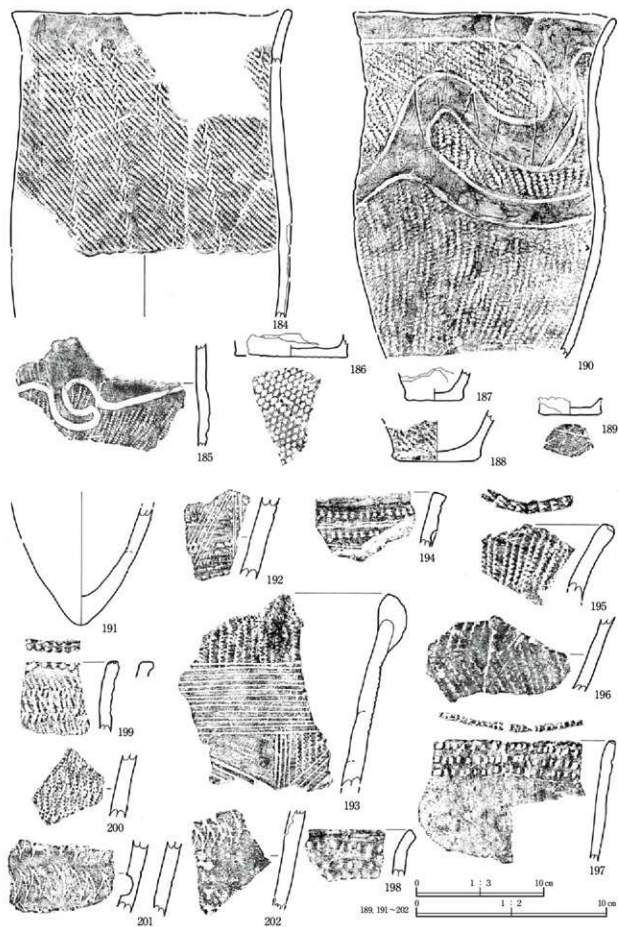
第204図 遺構内出土土器(11)



第205図 遺構内出土土器(12)



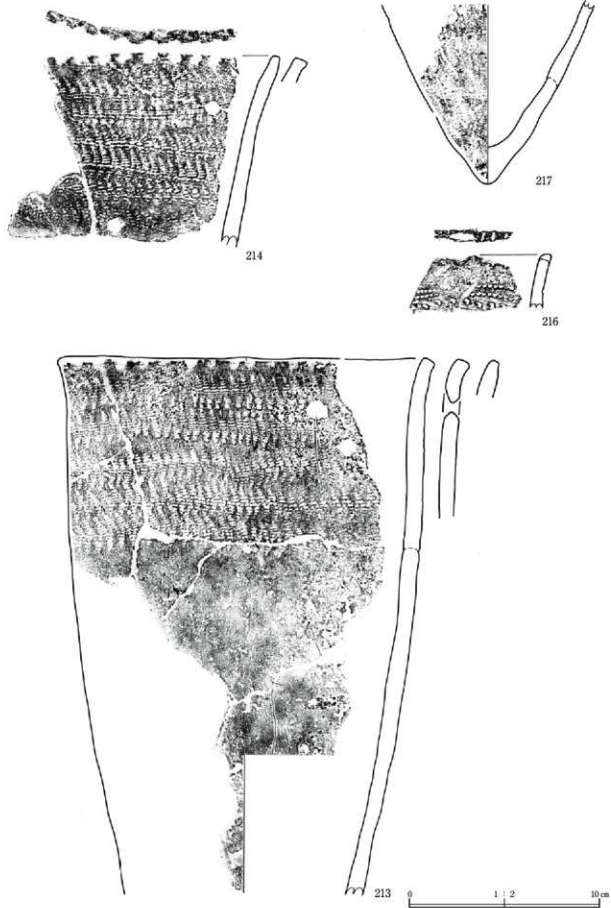
第206図 遺構内出土土器 (13)



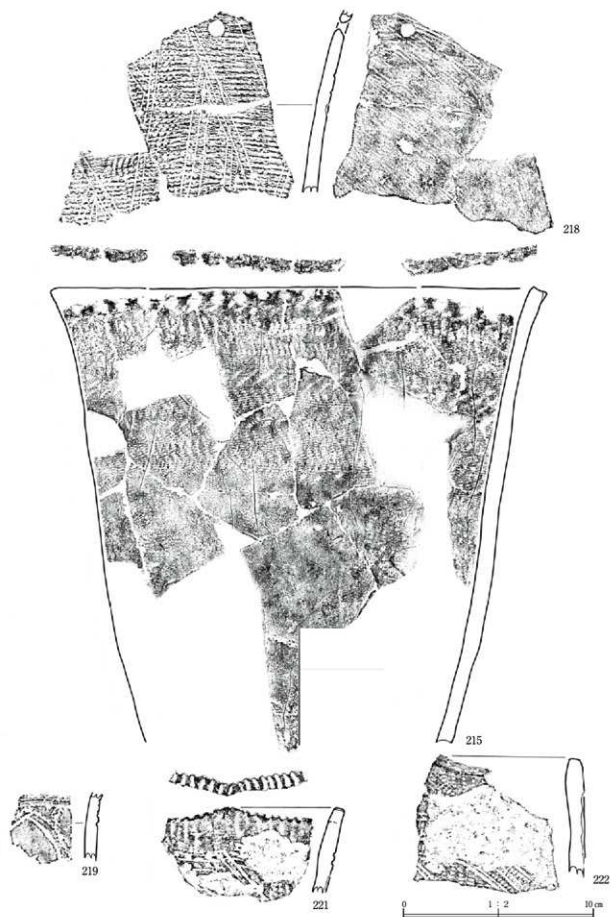
第207図 遺構内出土土器(14)



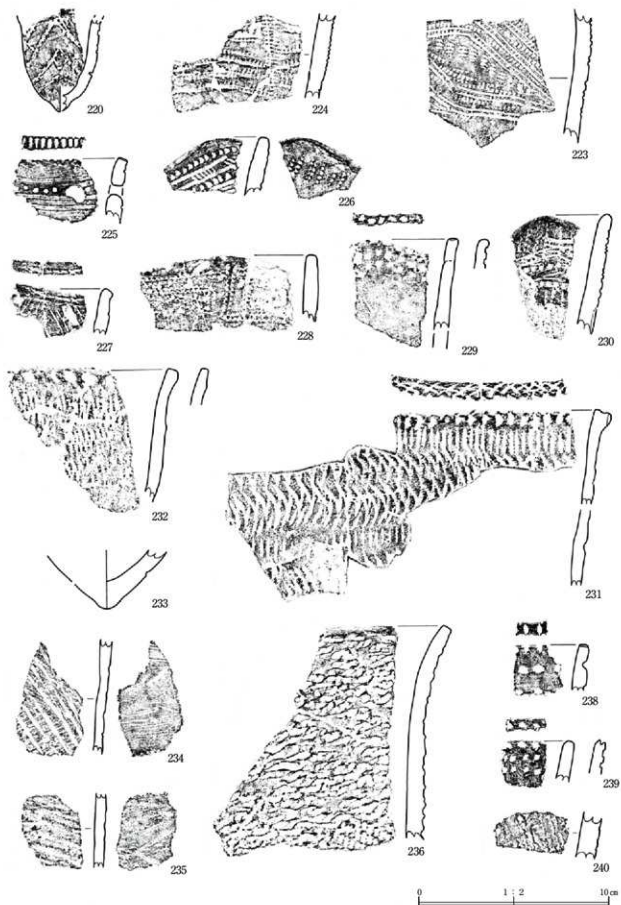
第208図 遺構内出土土器 (15)



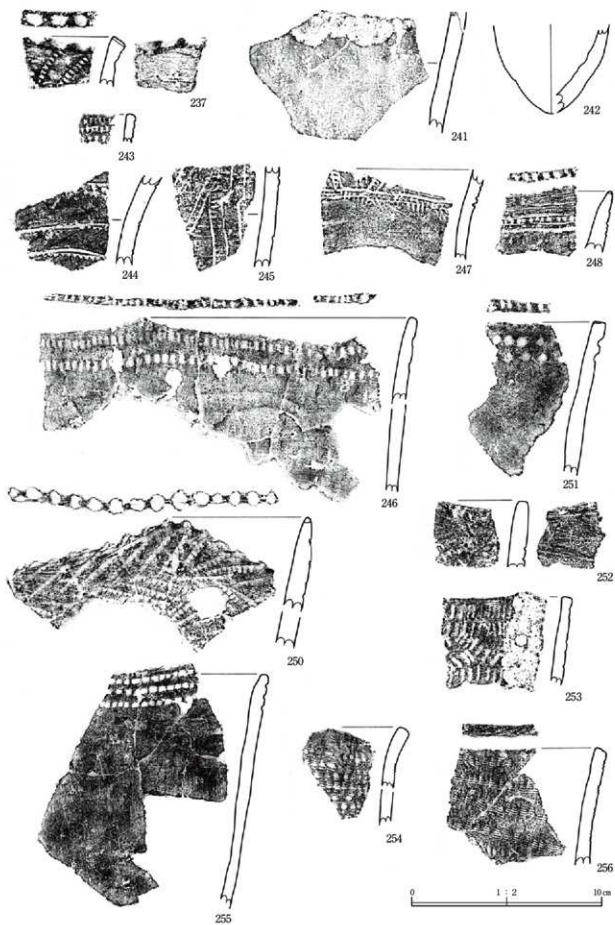
第209図 遺構内出土土器(16)



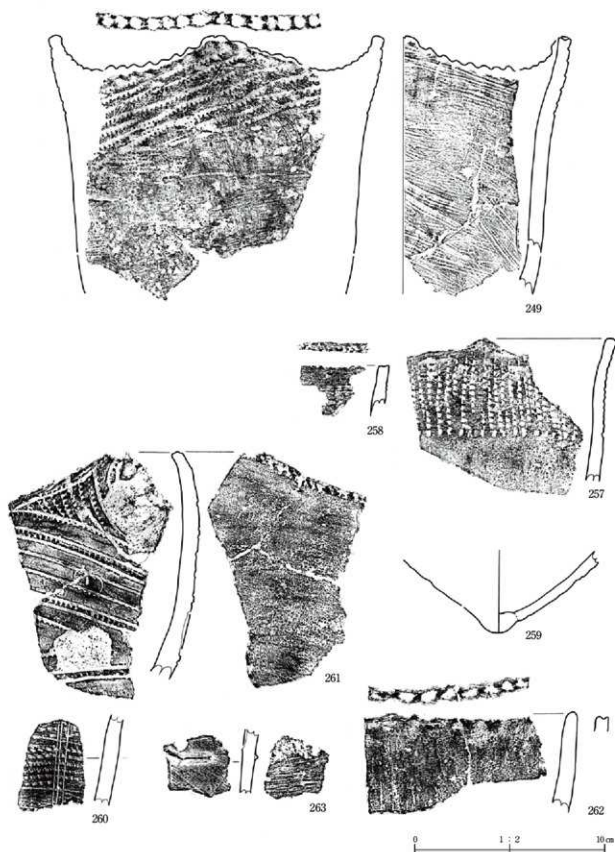
第210図 遺構内出土土器 (17)



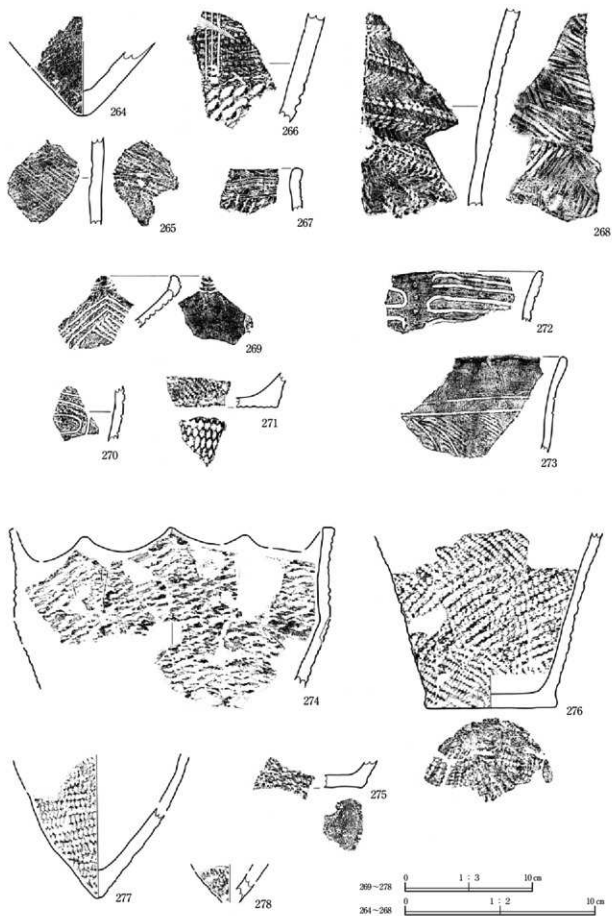
第211図 遺構内出土土器(18)



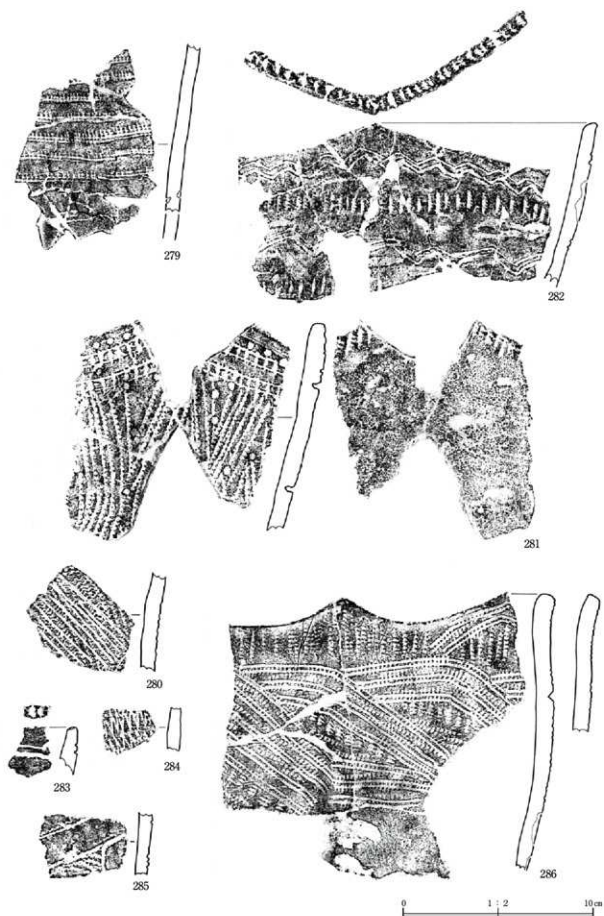
第212図 遺構内出土土器 (19)



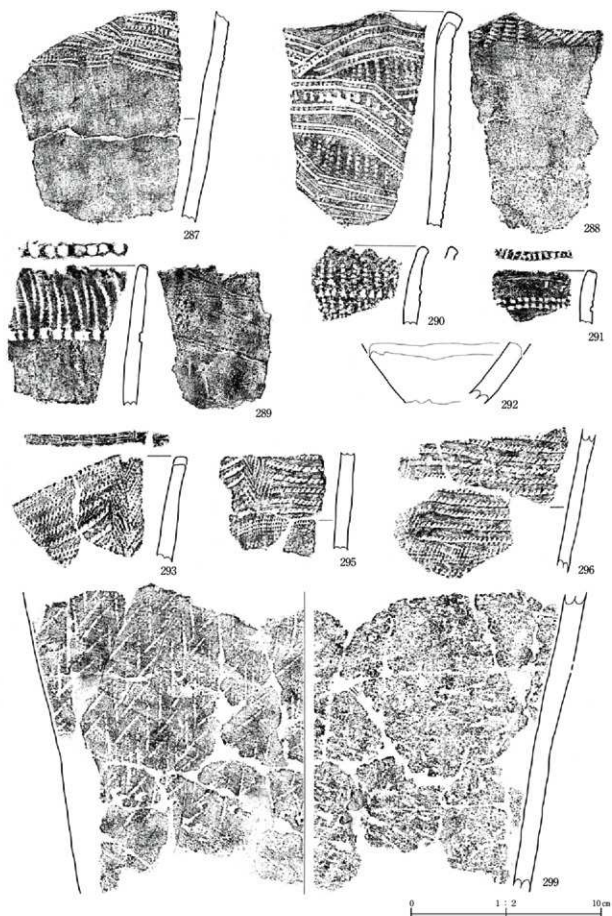
第213図 遺構内出土土器(20)



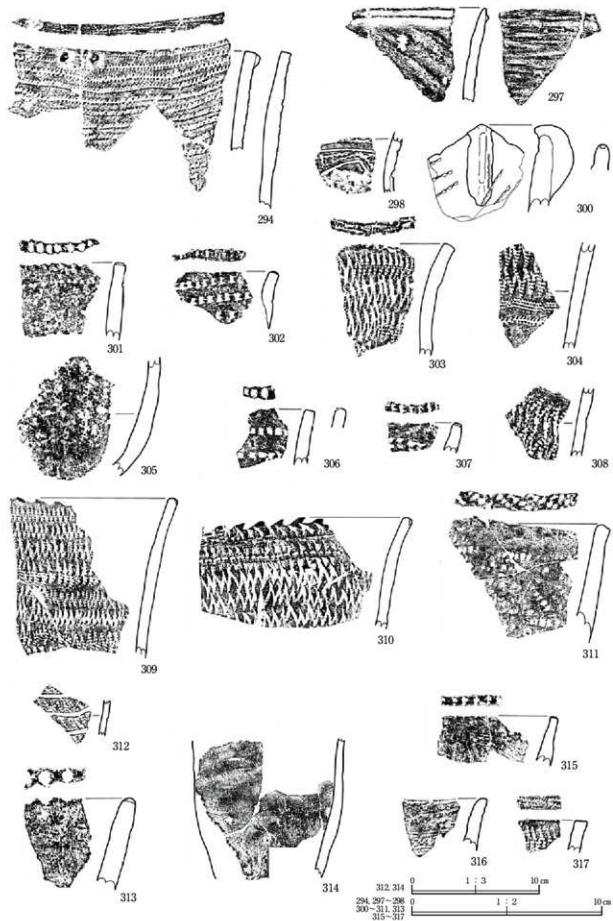
第214図 遺構内出土土器 (21)



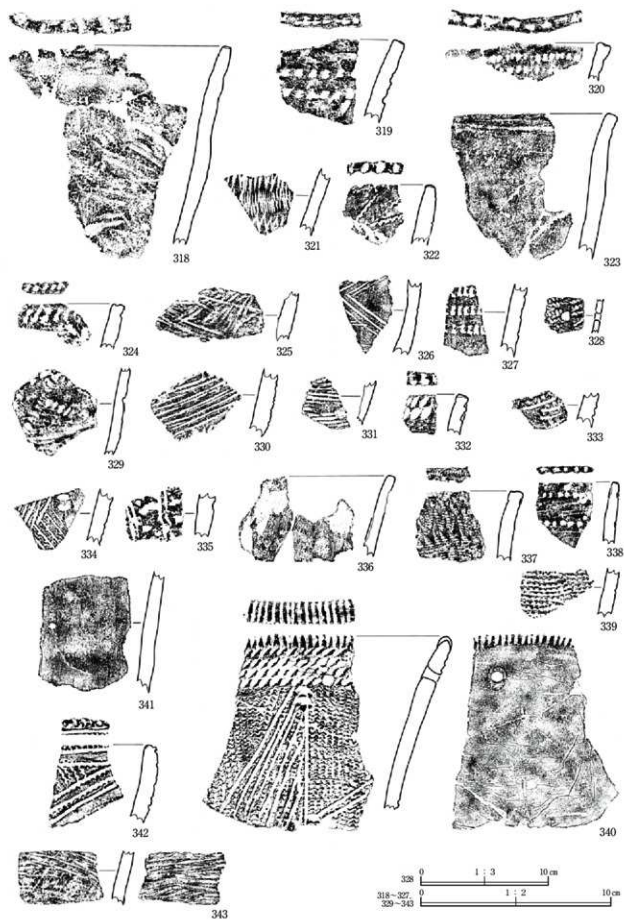
第215図 遺構内出土土器(22)



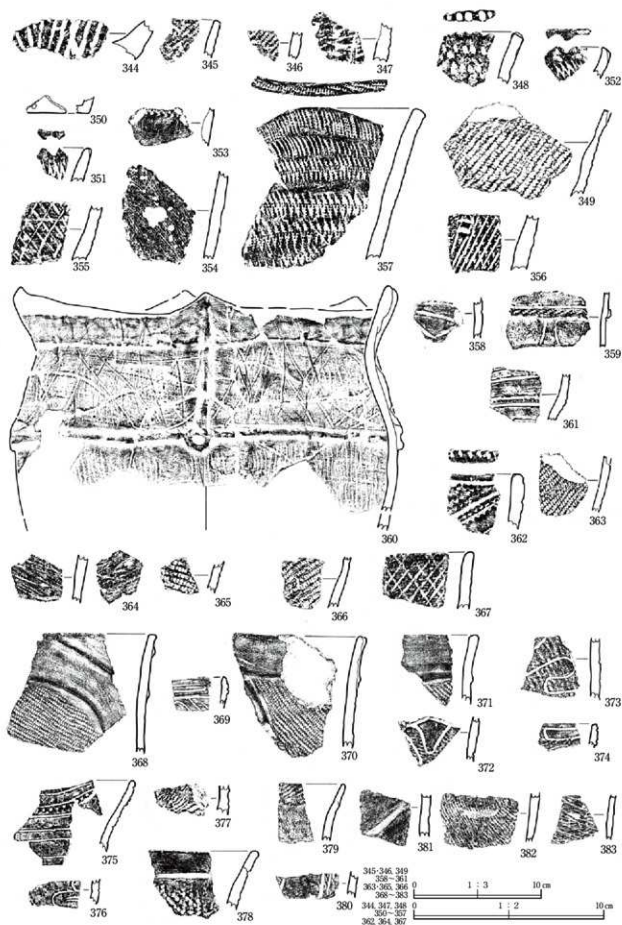
第216図 遺構内出土土器(23)



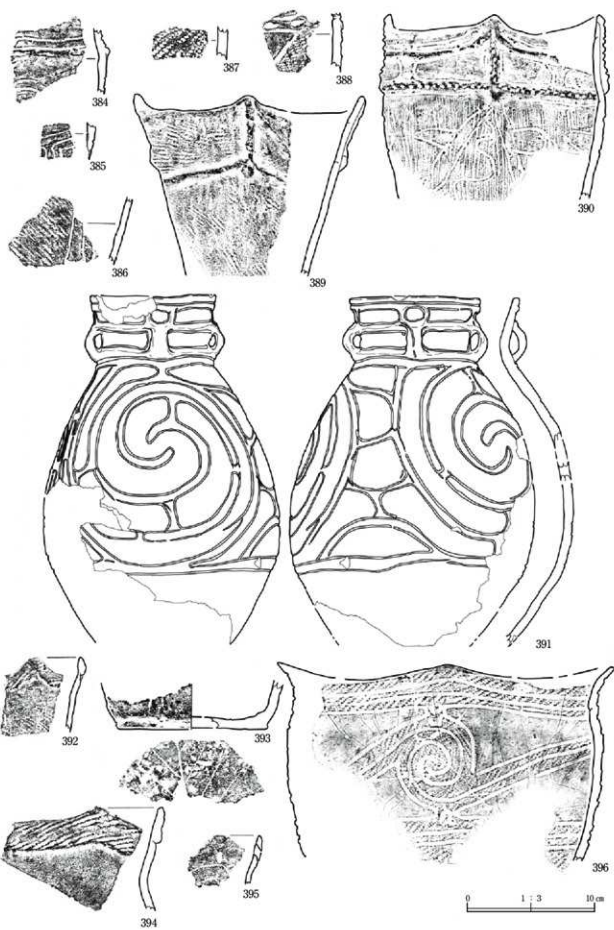
第217図 遺構内出土土器(24)



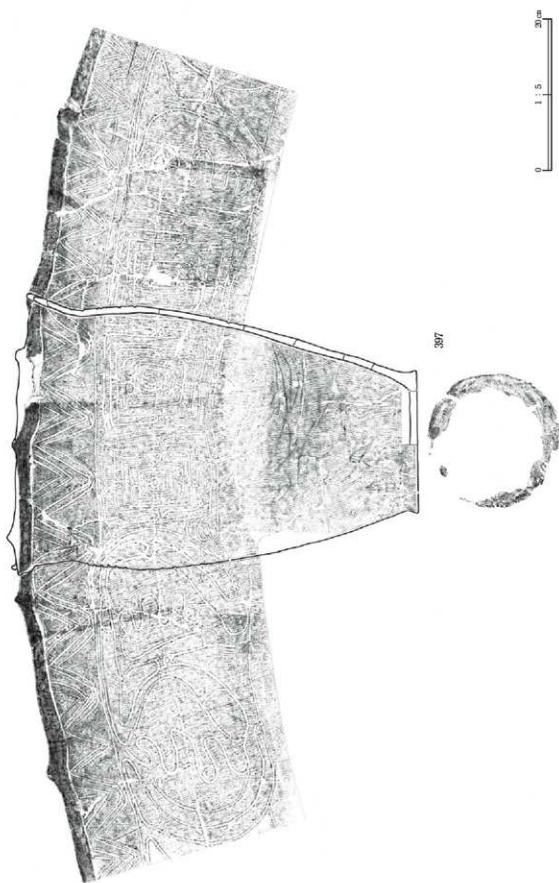
第218図 遺構内出土土器 (25)



第219図 遺構内出土土器(26)



第220回 遺構内出土土器 (27)



第221図 遺構内出土土器(28)